

ルーマニア語の複合過去

倍賞和子

I. Expresia (形)

ルーマニア語の複合過去は、直説法に於ては *avea* (< *habere*) + *participiul trecut* (過去分詞) という形をとる。*avea* はラテン語 *habere* の変化した形であり「持つ」という意味の動詞としても使用されるが、動詞として用いられる場合と助動詞として用いられる場合では少し異なった形をとる。*avea* の活用と、四つの規則活用動詞群から、代表的な動詞を選んで示すと下のようになる。尚、*avea* の後の () 内に示したのは動詞の形である。

<i>am</i> (<i>am</i>)		<i>cîntat</i> (不定詞 <i>a cînta</i> (歌う) 第1活用)
<i>ai</i> (<i>ai</i>)		<i>tăcut</i> (" <i>a tăcea</i> (黙る) 第2 ")
<i>a</i> (<i>are</i>)	+	<i>făcut</i> (" <i>a face</i> (作る、する) 第3 ")
<i>am</i> (<i>avem</i>)		<i>mers</i> (" <i>a merge</i> (行く) 第3 ")
<i>ați</i> (<i>aveți</i>)		<i>dormit</i> (" <i>a dormi</i> (眠る) 第4 ")
<i>au</i> (<i>au</i>)		<i>hotărît</i> (" <i>a hotărî</i> (決める) 第4 ")

過去分詞の形は、第1、第4活用に分類される動詞では不定詞に *-t* をつけた形となっているが、第2、第3活用の動詞では語幹に *-ut* をつけた形となる。第3活用の幾つかの動詞では過去分詞が語幹と異なった子音で終わっている。例、*ars* (*a arde*)、*mers* (*a merge*)、*copt* (*a coace*)、*fier* (*a fierbe*) 等。

これは音変化の結果の現象である。

この過去分詞は主語や目的補語の性や数に一致することはなく不変である。またフランス語に見られるように、動詞によって別の助動詞と過去分詞で複合過去を作るということはない。

助動詞と過去分詞の結びつきは可成強いが、常に一語のようにつけているわけではなく、副詞 *cam* (やゝ)、*și* (強め)、*prea* (あまりに)、*mai* (もまた) は間に置かれる。例、*am și plecat* (もうとっくに出発したよ。)、*Ați prea abuzat* (あなたは無駄遣いし過ぎましたよ。)

II. Conținutul (意味)

1) 過去として

ルーマニア語の複合過去は過去に起ったこと、完了したことを表わす。経験も過去の行為としてこの形で表わす。下に受動態、再帰態も含め幾つか例を挙げてみよう。

例、*Ce-ați făcut ieri?* (きのうあなたは何をしましたか。)

Cînd am coborît din tren la Constața, m-am întîlnit cu D-1. Petrescu.

(コンスタンツァで汽車から降りた時、私はペトレスク氏と会った。)

Am scris o scrisoare. (手紙を書いた。)

Nu v-am văzut de mult. (ずっとお会いしませんでしたね。)

S-au înțelese de minune. (彼らは互いに素晴らしく理解し合った。)

Hainele au fost puse pe scaun. (衣服は椅子の上に置かれた。)

Băiatul a fost omorât. (その少年は殺された。)

このように複合過去が多く使用されるようになったので、話し言葉に於ては、後に述べる方言を除いて、単純過去は使用されなくなった。単純過去は文章語の中で叙述部に用いられるだけである。

例、Va să zică tot Dumescu! murmură Miron Iuga mulțumit.

「ドメスクがみんな話すだろう。」ミロンイウガは満足気に呟いた。

Bine-ai venit, tinere, și să te simți la noi ca acasă! zise Miron Iuga.

「よく来たね、君、私たちのところでくつろいでくれ給え。」とミロンイウガは云った。

Oltenia, Banat, Apseni 山岳地方、Muntenia の西部の方言では過去の行為を表わすのに単純過去を用いるが、高等教育を受けた人、又都市生活を経験した人は複合過去を用いるようになるということである。また、単純過去と複合過去の両方を用いる方言では、単純過去が直前の過去を表わすのに対し遠く離れた過去を表わすには複合過去が用いられる。

例、Am fost anul trecut la București. (去年ブクレシュティへ行った。)

Fusei azi la moară, văzui un vultur. (= l-am văzut chiar acum)

(今日水車小屋へ行き、ワシを見た。(ほんの今))

2) Prezentul (現在)として。

複合過去は、話し言葉の中で、現在の意味で用いられることがある。

例、Am plecat. (= Plec.) (出かけるよ。)

Am tăcut. (= Tac.) (黙ります。)

III. Perfectul modurilor altora. (他の法の過去形)

modul conjunctiv (接続法), modul condițional-optativ (条件、希求法)、modul infinitiv (不定法)、modul prezumtiv (蓋然法) に於ては複合過去は助動詞 avea でなく、a fi (英語の to be に当たる) と過去分詞で作られる。de a fi chemat のような不定法ばかりでなく、現在形では人称によって活用する法に於ても、過去形の中ではこの a fi が不定詞と同じ不変化のまゝの形で現われるのである。

例、Modul conjunctiv (接続法)

Să se fi dus (彼(または彼女)は行くべきだった)

Să ți-l fi arătat (彼(または彼女)は君にこれを見せるべきだった。)

Modul condițional-optativ (条件、希求法)

Dacă n-aș fi venit aici, n-aș fi putut să te văd.

(もしこゝに来なかったら、君に会えなかっただろう。)

Modul infinitiv (不定法)

de a fi chemat (呼んだ---)

IV. Istoria perfectului compus al limbii române. (ルーマニア語の複合過去の歴史)

ラテン語に於ては、古典時代も、その後も所有の意であり、目的補語と過去分詞の性数の一致が見られるが、その後一致がなくなりこゝに複合過去の芽生えが見られるのである。

例、Omnia probatum habemus.

共通ルーマニア語においても、はじめはaveaは所有の意をもっていたが、後に文法的な働きをするようになっている。ア・ルーマニア語(マケド・ルーマニア語)に於ては現在も所有の意があるという。

助動詞aveaのそれぞれの人称の形がどうやって出て来たかは次のように説明されている。

habeo > aibu 複数形の類推で > am (注、aibuは古いダコ・ルーマニア語に見られる。)

habes > ae > ai

habet > ae(t) > a

habemus > aemu > amu > am

(aemu, aeți という形はア・ルーマニア語に見られる。)

habetis > aeți > ați

*habunt > au

正しい形 habent から au は出ないが、faciunt が facunt で現われるなど活用の混同が見られるので、多分 habunt という形が出て、そこから au が出たのではないかと説明されている。

16世紀には複合過去が形として既に完成しているが、単純過去と意味上の区別をもって用いられていた。教会スラブ語からの翻訳では、アオリストは単純過去で、完了は複合過去で行なわれている。

なお条件法は共通ルーマニア語では語尾変化による形で表わされており、助動詞を用いる分析型の形が用いられるようになったのはその後のことである。その過去形および、接続法の過去形は更に後にできたと考えられる。16世紀には条件法過去形に a fi を用いる形が見られるが、一説によれば(Al. Rosetti: *Istoria limbii române*, III. *Limbile slave meridionale*, București 1964)ブルガリア語の影響かということであるが、定説となっているわけではない。いずれにしても、この a fi はダコ・ルーマニア語のみに見られることから、他のルーマニア語(ア・ルーマニア等、つまり現在のルーマニア語と共通の祖語を持ち、ユーゴスラビア、ギリシアなどに点在している言語)とダコ・ルーマニア語が分かれた後の現象と考えられる。